

## 論文の内容の要旨

論文題目 シベ語のアスペクト・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化—

氏名 兎倉 徳和

本論文は、シベ語（満洲＝ツングース諸語）において従来テンス・アスペクト・モダリティとして記述されてきた要素について、発話参加者の記憶領域の状態（以下知識状態と呼ぶ）の変化という観点を導入して、新たに体系化を目指すものである。

本論文の特徴は、体系化に際し、できるかぎり個々の形態素（接辞、語尾、補助動詞）に固有の意味や機能を割当て、文全体が表す複雑なアスペクトとモダリティの意味を、それを構成する形態素（接辞、語尾、補助動詞）のそれぞれの意味や機能の組み合わせとして分析的に説明するという方針をとった点と、個々の形態素の意味や機能の説明に当たり、知識データベースとバッファという2つの記憶領域を発話参加者が持つと仮定することにより、異なる形態素が持つ意味や機能を、互いの関係を明確しつつ統一的に提示することを目指した点にあると考える。以下、本論文での論述に沿って、その前提と主張を要約する。

本論文ではまず、日本語の証拠推量表現「ようだ」と「らしい」について論じた齊藤（2006）に従い、言語主体の記憶領域に知識データベースとバッファという2つの領域を仮定し、本論文で扱う形式のうち、モダリティ語尾と補助動詞 *bi-*、*o-*、*yela-* は発話参加者の知識状態の変化を表すと仮定する。また、基本的な知識状態（知識データベースの内容）の変化として、(i) 直接経験や発話に基づく情報が命題の形式で知識データベースに書き込まれる、(ii) 知識データベース内の命題が削除される、(iii) 知識データベースに既存の命題が読み出されるという3つを仮定する。さらに、命題は知識データベースに書き込まれる際に、バッファにおいて知識データベースから読み出された関連する命題との間に矛盾がないかチェックを受け、矛盾が存在する場合には予め形式により定められた手段で矛盾が解消される、というプロセスを経ると仮定する。このような仮定を行うことにより、シベ語のアスペクト・モダリティの体系化を目指す。

本論文の主張は以下のようにまとめられる。

- [1] シベ語の動詞述語文の述部を構成する要素は平叙文の場合以下の図1のように整理される。本論文の主張するアスペクト・モダリティは、図中のアスペクト接辞、モダリティ語尾と補助動詞語幹の3つの要素によって表され、文全体の表すアスペクト・モダリティはそれぞれの形式が持つ意味を足し合わせることにより分析的に導くことが可能である。（名詞・形容詞述語文も補助動詞が後続した場合には動詞述語文に準じた分析が可能である。）

本動詞			本動詞		
語幹	アスペクト接辞		語幹	アスペクト接辞	モダリティ語尾
V-	-re / -Xe / -maye		—	—	=i / =ɲe / (なし)
			—	—	=i / =ɲe / (なし)

本動詞		補助動詞			
語幹	アスペクト接辞 (・副動詞)	語幹	アスペクト接辞	モダリティ語尾	
V-	-me / -Xe / -maye	+	bi-	-Xe	=i / =ɲe / (なし)
	-me	+	o-	-re / -Xe	=i / (なし)
	-me	+	yela-	-Xe	=i / =ɲe

図1 動詞述語文と動詞+補助動詞の構造

- [2] 述部の構成要素のうち、アスペクト接辞 -re、-Xe、-maye をモダリティ語尾 =i が後続した形式 -mi、-Xe*i*、-maye*i* の場合で比較すると、まず、-mi が -Xe*i*、-maye*i* の両者と異なることがわかる。なぜならば、-Xe*i* と -maye*i* が実際に実現した具体的な出来事を表すのに対し、-mi は具体的な出来事として実現していない事態（事柄）を表すからである。一方、-Xe*i* と -maye*i* の間には、-Xe*i* は完了的（perfective）に把握された、実際に実現した具体的な出来事、つまり「終結点を含んだものとして把握された、実際に実現した具体的な出来事」を表すのに対し、-maye*i* は非完了的（imperfective）に把握された、実際に実現した具体的な出来事、つまり「終結点を含まないものとして把握された、実際に実現した具体的な出来事」を表す、という相違が認められる。このことから、アスペクト接辞-re、-Xe、-maye の体系は以下の図2のようにまとめられる。

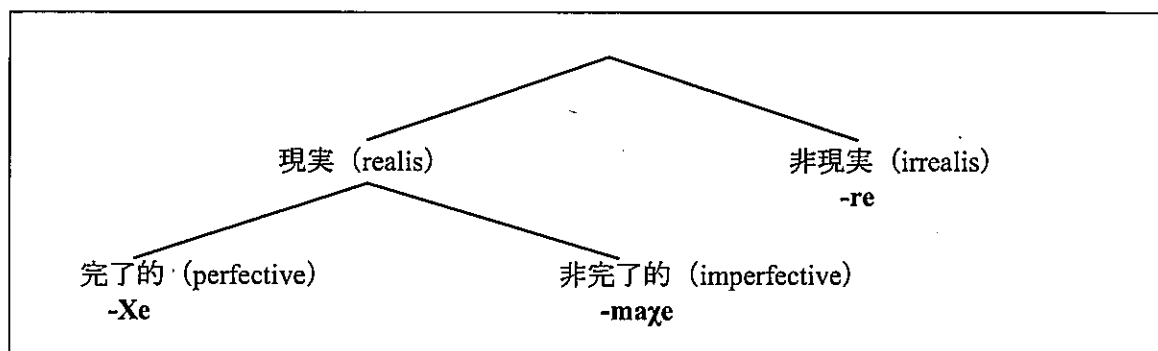


図2 動詞アスペクト接辞の体系

- [3] モダリティ語尾 =i、=ɲe は、アスペクト接辞に後続する場合と後続しない場合がある。まず、2つのモダリティ語尾が後続する場合を比較すると、=i が後続した形式は文の表す命題が発話参与者の知識データベースに書き込まれる、という発話参与者の知識データベースの状態変化を表し、=ɲe が後続した形式は文の表す命題が発話参与者の知識データベースから読み出されるという知識状態の変化を表すことがわかる。これに対し、モダリティ語尾が後続しない形式は、発話参与者の知識データベースの状態が変化しないことを表す。この体系は以下の図3のようにまとめられる。

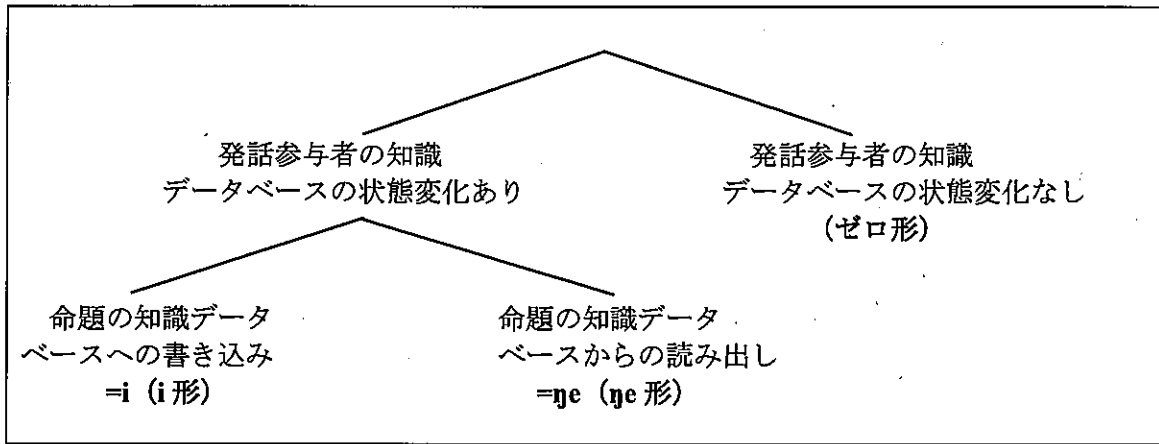


図3 モダリティ語尾 =i、=qe と語尾をとらない形式の表す知識状態の変化

- [4] 補助動詞 bi-、o-、yela- が後続する場合と後続しない場合の比較からは、補助動詞をとらない形式により表される知識状態の変化は、①話し手と聞き手両方の知識状態の変化である、②バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、一方が棄却、削除されることにより矛盾が解消される、という2つの特徴を持つことがわかる。補助動詞 bi-、o-、yela- はこの2つの特徴に関して、以下のように発話参与者の異なる知識状態の変化を表す。

まず補助動詞 bi- は、それを持たない形式が話し手と聞き手両方の知識状態の変化を表すのに対して、「話し手のみ」の知識状態の変化を表す。補助動詞 bi- をモダリティ語尾との関係で見ると、bi- にモダリティ語尾 =i、=qe がそれぞれ後続する形式、および、bi- に全く語尾が後続しない形式の、計三形式がある。bi- に =i が後続する場合は「話し手のみの知識データベースに文の表す命題が書き込まれる」、bi- に =qe が後続する場合は「話し手の知識データベースから文の表す命題が読み出され、話し手のみのバッファで処理が行われる」、bi- になにもモダリティ語尾が後続しない場合は「話し手のみの知識データベースの状態が変化しない」という知識状態の変化(ないし不変化)を表す。

補助動詞 o- と yela- は、以下の図4にあるように、これらの補助動詞を取らない形式が、バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、一方が棄却、削除されることにより矛盾が解消される、という知識状態の変化のプロセスを表すのに対し、補助動詞 o- と yela- は共通して「バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、いずれの命題も棄却、削除されることなく、命題の内容が改変されることにより矛盾が解消される」という知識状態の変化のプロセスを表す。一方、o- と yela- は、o- が「矛盾する両方の命題が改変される」のに対し、yela- は「yela- を含む文の表す命題のみ改変される」という点で区別される。さらに、補助動詞 o-、yela- にも、bi- に比べ制限があるものの、モダリティ語尾=i、=qe を取る形式とモダリティ語尾を取らない形式が存在し、補助動詞 o- の場合は「矛盾する両方の命題が改変される」、補助動詞 yela- の場合は「yela- を含む文の表す命題のみが改変される」という方法により矛盾が解消された上での、命題の知識データベースへの書き込みと知識データベースからの命題の読み出し、または知識データベースの状態の状態変化がないことを表す。

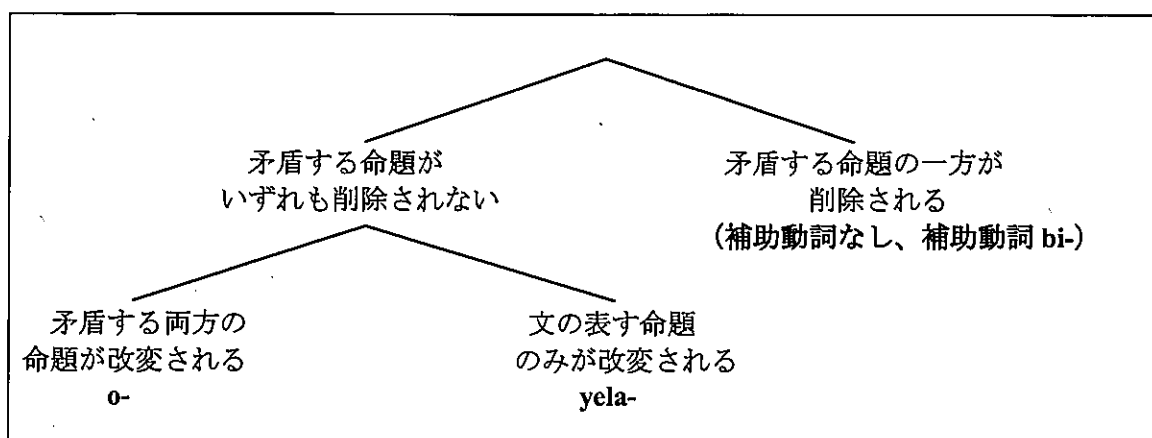


図4 補助動詞 o-, yela-の表す知識状態の変化

[5] 本論文の主張するアスペクト・モダリティ体系は、より整理された体系であるだけでなく、文に現れる分節的形式と文の取りうるイントネーションとの間の関係を捉えられるという点、および、モダリティ語尾=iをとる形式、=neをとる形式、モダリティ語尾をとらない形式の三形式の間に見られる形態統語論的な特徴の差異に妥当な説明を与えられるという点で、従来の分析より優れているといえる。

本論文の全体の構成は以下の通りである。

1章では、本論文での議論に必要なシベ語の概要について述べる。

2章では、先行研究の記述を出発点に、本論文で取り扱う形式と注目すべき問題点を整理したのち、本論文での仮定を導入する。

3章はアスペクト接辞の差異を、モダリティ語尾=iが後続する場合について論じ、上記の図2の体系を主張する。

4章では、2種類のモダリティ語尾=iと=ne、およびモダリティ語尾が後続しない形式の計3つの形式について、三形式が共通して主節の述部に用いられる完了形（動詞語幹に完了アスペクト接辞が後続した形式）の場合を取り上げて論じ、上記の図3の体系を主張する。

5章では、非完了形、非現実形の場合にも完了形と同様の議論が可能であることを論じ、さらにモダリティ語尾が現れない名詞・形容詞述語文の特徴を動詞述語文の特徴と比較しつつ検討する。

6章、7章では、4章、5章の議論のために行った、本論文で扱う言語形式が発話参加者の知識状態の変化を表すという分析、および、モダリティ語尾=iと=neがそれぞれ知識データベースへの命題の書き込みと知識データベースからの命題の読み出しを表すという状態変化を表すのに対し、モダリティ語尾が後続しない形式は知識データベースの状態変化がないことを表すという分析が妥当であることを、これらの言語形式に関わる具体的言語現象を取り上げて論じる。6章ではモダリティ語尾とイントネーションの共起関係を平叙文と疑問文に分けて論じ、言語形式が知識データベースの状態変化を表すか否かが共起するイントネーションの区別に関わっていることを示す。7章ではモダリティ接辞=i、=neが後続する形式と、後続しない形式の持つ統語的機能（連体用法、名詞用法）の差に対して、4、5章の分析に基づきこれらの形式が表す発話参加者の知識データベースの状態変化が可能な統語的単位の差異として妥当な説明を与える。

8章では、3つの補助動詞 bi-, o-, yela-の表す発話参加者の知識状態の変化について論じる。

9章では、本論文の分析が先行研究の中でどのような位置を占めるかの検討を行った上で、今後に残された問題点を整理する。

10章で本論文の主張をまとめる。